

陸游の詞について

朱 東潤
三野豊浩 訳

【凡例】

一、本稿は、朱東潤著『陸游研究』（一九六一年九月、中華書局）所収の論文「陸游的詞」の翻訳である。執筆の年代が古く、論述の端々から当時の政情に対する配慮が感じられるが、陸游詞の研究として古典的な価値を有するものと考え、その全文を翻訳した。

二、原文に注はないが、若干の訳者補注を末尾に記した。また読者の理解を助けるため、原文にない言葉を補ったり、意識したりした箇所があるが、繁雑を避けるため、それらについては特に注記しなかった。

陸游（一一二五～一二二〇）の詞は、陸游の詩と同様に、当時名声を博していた。しかし、彼の詩が過去を継承して未来を切り拓き、自ら一家を成したため、詞人としての名声は詩人としての名声の影に隠れてしまい、後世は通常、彼をただ「詩人」と称するにとどまる。

作品の分量から問題を検討するならば、陸游の詩は約九二〇〇首が存在する^①。これに対し詞は約一三〇〇首が存在するが、詩のわずか一・四パーセントに過ぎず、見るからに、陸游の詞は彼の詩よりもはるかに少ない。次に、陸游の詩はすでに編年されているので、我々は比較的全面的に、彼の詩が如何に発展したかを知ることができる。しかし彼の詞はまだ編年されておらず、様々な手がかりから創作の時期を推定できるものもあるが、多くの作品には推定の手がかりがないので、十分に全面的な認識を持つのは難しい。仮に、淳熙五年（一一七八）に陸游が五四歳で四川を離れた時点を境界線とするならば、彼が青年期から中年期に四川を離れるまでの間に書いたと推定される詞は全部で四七首あり、全体の八分の三に相当する。しかし、現存する陸游の詩について見るならば、彼の同じ時期における作品（『劍南詩稿』巻一から巻一〇の途中まで）は約一一三〇首であり、全体の八分の一に過ぎない。もちろんこれは、陸游は五四歳以前には、作詞に対する興味関心がやや旺盛であった、と言っているわけではない。なぜなら、現存する陸游の詩は、彼の作品のすべてではないからである。彼は中年以前、特に若い時期の作品に対し厳格な取捨選択を行ったので、この時期の詩で現存するものは比較的少ない。ではなぜ彼は、自分の詞に対しても同様に厳格な取捨選択を行なわなかったのだろうか。このことは、陸游の詞の創作に対する要求は、彼の詩に対するその厳格さに、はるかに及ばないものであったことを物語っている。彼の詩は独自に一家を成し得たのに対し、詞はその影に隠れざるを得なかったのは、このことも一因かも知れない。

北宋後期の詞人として、蘇軾（一〇三七～一一〇一）と秦觀（一一〇九～一一〇〇）は同時代人である。蘇軾の詞はあ

のように壯麗闊達で、自ら新生面を切り開いたが、これに対し秦觀の詞は繊細で纏綿としており、その情趣が魅力的である。南宋の前期において、辛棄疾（一一四〇～一二〇七）は蘇軾に近く、陸游は秦觀に近い。もともと、辛棄疾は激情を発散し唯我独尊であり、陸游は虚飾を一掃し超然脱俗であつて、それぞれに蘇軾や秦觀とは幾分異なるが、大体において連続性を見出すことができる。

蘇軾は詞の古い方から脱却し、新しい方向を見出したが、秦觀は依然として従来のある方の中で徘徊していた。陸游と辛棄疾の違いも、まさにここにある。この点では辛棄疾は陸游に勝るが、陸游は結局において秦觀とは異なる。時代状況が異なるため、彼は自分の時代認識を詞に映し出す必要があつたのである。

陸游の「釵頭鳳」詞は、周密の『齊東野語』によれば、彼が母親に迫られ、愛妻の唐琬と離婚した後の作品である。

釵頭鳳

紅酥手

紅酥の手

黄滕酒

黄滕の酒

滿城春色宮牆柳

滿城の春色 宮牆の柳

東風惡

東風 悪しく

歡情薄

歡情 薄し

一懷愁緒

一懷の愁緒

幾年離索

幾年の離索ぞ

錯錯錯

錯^{あやま}てり 錯^{あやま}てり 錯^{あやま}てり

春如旧

春は旧の如きも

人空瘦

人は空しく瘦せたり

淚痕紅澗鮫綃透

淚痕 紅^{うらお}に洩^あい 鮫綃 透る

桃花落

桃花 落^{おち}ち

閑池閣

池閣 閑^{いさ}かなり

山盟雖在

山盟 在^ありと雖も

錦書難託

錦書 託し難し

莫莫莫

莫^なかれ 莫^なかれ 莫^なかれ

〔渭南文集〕卷四九

紹熙三年（一一九二）陸游六八歳の時に、次のような題の七律一首がある。

禹跡寺南有沈氏小園、四十年前嘗題小關壁間、偶復一到而園已易主、刻小關于石、讀之悵然

禹跡寺の南に沈氏の小園有り、四十年前 嘗て小關を壁間に題す。偶^{たま}たま復^{また}た一たび到るに 園 已に主を

易え、小關を石に刻めり。之を讀みて悵然たり

〔劍南詩稿〕卷二五

「四十年前」というのはおおよその数字で、実際は紹興二五年（一一五五）、陸游三一歳の時のことである。当時、陸游はすでに王氏と再婚し、子虞と子龍も生まれていたが、唐琬への愛情を、なおも忘れることができていた。ここではまさに、彼らの間の感情の深さと、字句が纏綿として凄愴である、という特徴が見出され、また、こうした表現手法が秦観に由来するものであることが指摘できる。

「釵頭鳳」の次に古い作品としては、福建にいた時に書かれた「青玉案（西風挾雨声翻浪）」詞がある。隆興二年（一一六四）、陸游は鎮江府通判の任にあり、韓元吉（一一一八―一一八七）らと同じ場所で過ごし、同地で書かれたと考えられる作品が四―五首ある。乾道六年（一一七〇）、陸游は四川に入り、翌年を夔州で過ごし、同地で書かれたと考えられる作品が三―四首ある。彼は生活の上で大きな変化を経験したにもかかわらず、詞風は変化していない。このことは、陸游は夔州に到着し、詩は変化したにもかかわらず、詞は変化しなかったことを物語る。それから更に一―二年後、彼の詞がすでに変化し始めていた時期でさえ、例の情緒纏綿という特徴を隠しきれなかったことが、次の詞から見てとれる。

蝶恋花 小益を離れての作

陌上箫声寒食近 陌上の箫声 寒食 近し

雨過園林 雨 園林を過ぎ

花気浮芳潤 花気 浮かぶこと芳潤なり

千里斜陽鐘欲暝 千里 斜陽 鐘 暝れんと欲す
憑高望斷南樓信 高きに憑りて望斷す 南樓の信

海角天涯行略尽 海角 天涯 行きて略ぼ尽くす

三十年間 三十年の間

無処無遺恨 処として遺恨無きは無し

天若有情終欲問 天 若し情有らば 終に問わんと欲す

忍教霜点相思鬢 霜をして相思の鬢に点ぜしむるに忍びんやと

〔渭南文集〕卷四九

このような詞はただひたすら情緒的で、まさに南唐・北宋以来のあり方であり、こうした作風は、陸游が秦觀から受け継いだものである。四川にいた時、彼は「漁家傲 仲高に寄す」詞を書いて故郷と兄弟への思慕をうたい、四川を離れる準備をしている最中には「南郷子（歸夢寄吳櫓）」詞を書き、その末尾で次のようにうたっている。

重到故郷交旧少 重ねて故郷に到れば 交旧 少にして

淒涼 淒涼ならん

却恐他郷勝故郷 却って恐る 他郷の故郷に勝るを

これら二首の詞は、いずれも読者を深く感動させるが、いまだに個人的な悲哀や感傷を脱していないように思われる。

しかし、彼の詞は必然的に変化しなければならなかった。南宋前期の詞人たちの作風は、北宋の詞人たちのそれとは異なる。陸游と辛棄疾のみならず、彼らよりもやや先か、同じ時代の詞人たちも、同様である。趙鼎の「滿江紅（慘結秋陰）」、岳飛の「滿江紅（怒髮衝冠）」、張元幹の「賀新郎（夢繞神州路）」、朱敦儒の「相見歡（金陵城上西樓）」、張孝祥の「六州歌頭（長淮望斷）」、劉過の「沁園春（斗酒虜肩）」、これらすべての作品が、いずれも南宋前期という時代を映し出している。陸游や辛棄疾の詞に映し出されているものも、まさしくその時代の精神なのである。ただ注意すべきは、陸游の詞風が変化したのがいつ頃か、ということと、彼の詞風が変化した後でも、依然として独自の風格を保ち続けた、ということだけである。

乾道八年（一一七二）春、陸游は夔州を離れ、南鄭の前線へと向かい、詞風は変化し始める。

鷓鴣天 葭萌駅にての作

看尽巴山看蜀山 巴山を看尽くし 蜀山を看る

子規江上過春殘 子規の江上に春殘を過ごす

慣眠古駅常安枕 眠るに慣れ 古駅にも常に枕を安くし

熟聽陽關不慘顏 聴くに熟し 陽關にも顔をいた惨ましめず

慵服氣

氣を服するに慵もつろく

懶燒丹

丹を焼もつろくに懶し

不妨青鬢戲人間

妨げず 青鬢 人間に戯るを

秘伝一字神仙訣

秘伝の一字 神仙の訣

説与君知只是頑

君に説与して知らしめん 只だ是れ頑なりと

〔渭南文集〕卷四九

陸游の詞全体からすれば、この詞は名作とは言えないが、この中に、すでに彼の頑強な性格が見てとれる。陸游が南鄭に向かつて出発した時には、まさに彼自身がうたうように、次のような状況であった。

書生迫飢寒

書生 飢寒に迫られ

一飽輕三巴

一飽せんがために 三巴を輕しとす

三巴未云已

三巴 未だ云に已まざるに

北首趨褒斜

北首して褒斜に趨く

〔劍南詩稿〕卷三「鼓樓舖醉歌」

しかし、前線に近づくにつれ、陸游の意志は、絶えず堅固なものへと変化して行つた。「頑」は彼の一字の座右の銘であり、新しい人生觀であり、ただ「頑」さえあれば、彼は「古い宿場駅でもぐつすり眠ることができ、陽関

の曲を聴いてもつらそうな顔をしない」という風でいられたのである。

前線に到着した後、陸游は広汎な大衆の国家に対する責任を見てとり、同時に自分自身の責任をも見てとった。彼と宣撫使王炎（南鄭幕府の長官）の關係は、良好なものであった。前線の準備作業はまさに進行中であり、動員の命令がひとたび下れば、手に唾して長安を奪い返してみせる、と彼らは意気込んでいた。陸游の「秋波媚」詞は、こうした情況の下で書かれたものである。

秋波媚 七月十六日 晩に高興亭に登り長安の南山を望む

秋到辺城角声哀 秋 辺城に到り 角声 哀し

烽火照高台 烽火 高台を照らす

悲歌擊筑 悲歌して 筑を撃ち

憑高酌酒 高きに憑り 酒を酌ぐ

此興悠哉 此の興 悠なるかな

多情誰似南山月 多情なること 誰か似ん 南山の月の

特地暮雲開 特地に暮雲を開くに

灞橋煙柳 灞橋の煙柳

曲江池館 曲江の池館

応待人来

応に人の来たるを待つなるべし

〔渭南文集〕卷四九

この詞には、敵を倒したいという激情と、勝利を目前にした喜びとが満ちており、陸游の詞の中で、最も際立った一首である。陸游が南鄭時代の心境を述べた詩の多くは、事破れた後の追憶であるため、感情はこの詞のように熱烈ではないのである。

しかし、良い夢は長くは続かないものである。七月一六日、陸游はなおも長安に進攻する計画を立てていた。ところが九月一二日、南宋の小朝廷は王炎を呼び戻す詔を下し、幕府の面々は、ほどなく散り散りになってしまった。陸游は南鄭を離れた後、次の「蝶恋花」詞を書いている。

蝶恋花

桐葉晨飄蛩夜語

桐葉 晨に飄り 蛩 夜に語る

旅思秋光

旅思 秋光

黯黯長安路

黯黯たり 長安への路

忽記横戈盤馬処

忽ち記す 戈を横たえ馬を盤めくらせし処

散関清渭応如故

散関 清渭 応に故の如くなるべし

江海輕舟今已具

江海の輕舟 今 己そなに具そなわる

一卷兵書

一卷の兵書

嘆息無人付

嘆息す 人の付する無きを

早信此生終不遇

早つとに信ず 此の生 終に不遇なりと

当年悔草長楊賦

当年 悔ゆらくは 長楊の賦を草せしことを

(『渭南文集』卷四九)

この詞が乾道八年の作か否かは、断定できない。^⑦ 陸游が最終的に南鄭を離れたのは一月二日であり、すでに「桐の葉が朝早くにひるがえり、コオロギが寒い夜に鳴く」という時節ではない。しかし、詞人が物に託して自分の心情をうたおうとして、「桐飄蛩語」から説き起こした、ということはある得よう。確かなのは、陸游がこの詞の中で縦横に自己の感傷を吐露している、ということである。

感傷と言うならば、それは秦觀の詞の旧套に逆戻りすることではないのか。だが、ここには幾分違いがある。秦觀が関心を寄せているのは個人的な感情であるが、陸游のこの詞は、個人から出発してはいない。彼が関心を寄せているのは「散関清渭」という国家民族の問題なのである。彼は、軍事的な計画が実現できず、敵の手に落ちた地域を機会に乗じて奪い返すことができないうために、感傷しているのである。出発点が異なるために、このことは秦觀と陸游の作品の間に明確に境界線を引いている。このように言うことは、必ずしも秦觀をおとしめることにはならない。彼らが生きた時代が異なるために、作品に映し出される内容が異なり、作風も異なるのである。

南鄭から昭化県の南にある葭萌駅までは、ごくわずかの道のりである。葭萌駅を通過した時、陸游は次のような

詞を書いている。

清商怨 葭萌駅にての作

江頭日暮痛飲

江頭 日暮 痛飲す

乍雪晴猶凜

乍^{たちま}雪^まふり 晴るるも猶^{さむ}お凜し

山駅淒涼

山駅 淒涼たり

灯昏人独寝

灯^{くら}昏く 人^{ひと}独り寝ぬ

鴛機新寄断錦

鴛機 新たに断錦を寄す

嘆往時不堪重省

往時を嘆じ 重ねて省^{かえり}みるに堪えず

夢破南楼

夢 南楼に破れ

緑雲堆一枕

緑雲 一枕に堆す

〔渭南文集〕卷四九

陸游が葭萌を通過したのは、一度だけではない。春に南鄭に向かった時には、彼はあれほど喜んでた。しかし一月に南鄭から呼び戻された時には、状況は完全に異なっていた。彼の失意は、単身で南に向かい、家族を南鄭に置いて来たことによるのであるのか。それゆえ「ともし火はほの暗く、一人さびしく横になる」という感慨があ

るのであろうか。そうではない。陸游が南鄭に向かった時には、自分が先に出發し、家族は後からついて行った。それゆえ「鼓樓鋪醉歌」詩には、次の二句がある。

稚子入旅夢

稚子 旅の夢に入り

挽鬚勸還家

鬚を挽きて 家に還らんことを勸む

今は南鄭を出發するにあたり、家族全員が陸游に同行している。『劍南詩稿』卷三に次のような題の詩があり、このことを証明できる。

壬辰十月十三日、自閬中還興元、遊三泉龍門。十一月二日、自興元適成都、復携兒曹往遊、賦詩

壬辰十月十三日、閬中より興元に還り、三泉の龍門に遊ぶ。十一月二日、興元より成都に適き、復た兒曹を携えて往きて遊び、詩を賦す

そうであるからには、「清商怨」詞の後関は、「賦」ではなく「比」であると断言してよい。「過ぎた昔を嘆き悲しみ、もう二度と振り返ってみることに堪えられない。夢は南樓に破れ、雲なす髪を枕に押しつけるようにして眠る」という一節から、南鄭からの呼び戻しが陸游にいかほど深刻な打撃を与えたかを、はっきり見てとることができる。

乾道八年年末、陸游は成都に到着した。その翌年に書かれた「漢宮春」詞は、当時の心情を縦横にうたっている。

漢宮春

初めて南鄭より成都に來たりての作

羽箭雕弓

羽箭 雕弓

憶呼鷹古墨

鷹を古墨に呼び

截虎平川

虎を平川に截りしを憶う

吹笳暮歸野帳

笳を吹き 暮れに野帳に歸れば

雪圧青氊

雪 青氊を圧す

淋漓醉墨

淋漓たる醉墨

看龍蛇

看よ 龍蛇の

飛落蛮牋

飛びて蛮牋に落つるを

人誤許

人 誤りて許す

詩情將略

詩情 將略

一時才氣超然

一時に才氣 超然たりと

何事又作南來

何事ぞ 又た南に來たるを作し

看重陽藥市

重陽の藥市と

元夕灯山

元夕の灯山とを看んとは

花時万人樂処

花時 万人の樂しむ処

欅帽垂鞭

帽を欅そはだて 鞭を垂る

聞歌感旧

歌を聞きては旧に感じ

尚時時

尚お時時に

流涕樽前

樽前に涕を流す

君記取

君 記取せよ

封侯事在

封侯の事 在あり

功名不信由天

功名 信ぜず 天に由るを

〔渭南文集〕卷四九

同様の感情は、その他の二首の詞からも読みとれる。

夜遊宮

夢を記し師伯渾に寄す^⑧

雪暁清笳乱起

雪暁 清笳 乱れ起こる

夢遊処

夢に遊ぶ処

不知何地

知らず 何れの地ぞ

鉄騎無声望似水

鉄騎 声 無く 望めば水に似たり

想関河

想えば関河は

雁門西
青海際

雁門の西か
青海の際か

睡覺寒灯裏

睡りは覚む 寒灯の裏

漏声断

漏声 断え

月斜窓紙

月 窓紙に斜めなり

自許封侯在万里

自ら許す 侯に封ぜらるるは万里に在りと

有誰知

誰か知ること有らん

鬢雖残

鬢は残なわると雖も

心未死

心は未だ死せざるを

〔渭南文集〕卷五〇

桃源憶故人

華山の図に題す

中原当日三川震

中原 当日 三川 震え

関輔回頭煨燼

関輔 頭を回らすまに煨え燼く

涙尽両河征鎮

涙は尽く 両河の征鎮

日望中興運

日に望む 中興の運を

秋風霜滿青鬢 秋風 霜 青青たるの鬢に滿ち

老却新豊英俊 新豊の英俊を老却せしむ

雲外華山千仞 雲外 華山 千仞

依旧無人問 旧に依りて人の問う無し

〔渭南文集〕卷五〇〕

南鄭から呼び戻されたことは、すべての希望の終焉であり、国家の前途という見地からしても、個人の事業という見地からしても、ただ一面の空虚であった。右にあげた「漢宮春」詞は、陸游が南鄭を離れたばかりの時の作品であり、それゆえ音調は沈鬱で、前関と後関の間には大きな感情の落差があり、特に前関は戦場の雰囲気に満ちている。「夜遊宮」「桃源憶故人」の二首は、いずれも心を激しく揺さぶられるかのようで、わずか数句で陸游の内心の苦痛を余すところなく伝えている。この「漢宮春」詞から更に発展して行けば、陸游は辛棄疾のような道を歩んだかも知れない。しかし、結局において陸游は陸游であり、彼はやはり南唐・北宋以来の道を歩んだ。「眠りから覚めてみれば、ぼつんと一人、寒々としたともし火の照らす中。漏刻の音は途絶え、月の光は窓の障子紙に斜めに射し込んでいる」という一節は、失意と悔恨に満ち、凄愴かつ宛転にうたわれており、これが陸游の辛棄疾とは異なる点である。

乾道八年年末、陸游は成都に到着し、以後淳熙五年（一一七八）まで、四川に六〇七年滞在する。この時期に陸游は過去を追憶し、また望郷の思いに駆られたが、自分が置かれた現実を正しく理解するすべを持たなかった。こ

れはまさしく、陸游の詞にうたわれた境地である。

感皇恩

小閣倚秋空

小閣 秋空に倚り

下臨江渚

下 江渚に臨む

漠漠孤雲未成雨

漠漠たる孤雲 未だ雨を成さず

数声新雁

数声の新雁

回首杜陵何処

首を回らせば 杜陵は何処ぞ

壮心空万里

壮心 空しく万里

人誰許

人 誰か許さん

黄閣紫枢

黄閣 紫枢

築壇開府

壇を築き 府を開く

莫怕功名欠人做

おそ 怕るる莫かれ 功名 人の做すに欠けたりと

如今熟計

如今 計 熟せり

只有故郷歸路

只だ有り 故郷への歸路

石帆山脚下

石帆山の脚下に

菱三畝

菱 三畝あり

(『渭南文集』卷四九)

陸游は蜀を離れ東に帰った後、絶えず南鄭での生活を追想した。彼の詩しかり、彼の詞またしかりである。

訴衷情^⑩

当年万里覓封侯

当年万里に封侯を^{もと}覓め

匹马戍梁州

匹马もて梁州を^{まも}戍りしも

関河夢断何処

関河の夢は何処にか断たれし

塵暗旧貂裘

塵は旧貂裘を暗くす

胡未滅

胡 未だ滅せざるに

鬢先秋

鬢 先^まず秋なり

淚空流

淚 空しく流る

此生誰料

此の生 誰か料^{はか}らん

心在天山

心は天山に在^あるも

身老滄州

身は滄州に老いんとは

謝池春^①

壯歲從戎

壯歲 戎に従い

曾是氣吞殘虜

曾て是れ 氣は殘虜を呑む

陣雲高

陣雲 高く

狼煙夜舉

狼煙 夜に挙がる

朱顏青鬢

朱顏 青鬢

擁雕戈西戍

雕戈を擁して西を戍りまも

笑儒冠

笑う 儒冠

自來多誤

自來 誤ること多しと

功名夢斷

功名の夢 断え

却泛扁舟吳楚

却つて扁舟を吳楚に泛うかぶ

漫悲歌

漫まぞろに悲歌し

傷懷弔古

傷懷いししえして古を弔う

煙波無際

煙波 際 無し

望秦関何処

望めば秦関は何処ぞ

歎流年

嘆ずらく 流年の

又成虚度

又た虚しく度ると成らんことを

〔渭南文集〕卷五〇

これらの詞の中にあるのは、失意であり、落胆である。ここから更に一步を踏み出せば、たやすく憤懣となり得よう。陸游に、そのような心情がなかったわけではない。彼は、次のようにうたっている。

夜遊宮 宮詞

独夜寒侵翠被

独夜 寒 翠被を侵し

奈幽夢

幽夢を奈んせん

不成還起

成らずして還た起こる

欲写新愁淚濺紙

新愁を写がんと欲して 涙 紙に濺ぐ

憶承恩

恩を承けしを憶い

嘆余生

嘆ず 余生の

今至此

今 此に至るを

藪藪灯花墜

藪藪として 灯花 墜ち

問此際

此の際を問うに

報人何事

人に何事をか報ぜん

咫尺長門過万里

咫尺の長門 万里に過ぐ

恨君心

恨むらくは 君の心

似危欄

危欄に似て

難久倚

久しくは倚り難きを

〔渭南文集〕卷五〇）

この詞の中心となる主題は、辛棄疾の「摸魚兒（更能消幾番風雨）」詞と完全に一致している。^⑫しかし、辛棄疾は同詞の自注で次のように記している。

淳熙己亥、自湖北漕移湖南、同官王正之置酒小山亭、為賦

淳熙己亥のとし、湖北の漕より湖南に移るに、同官の王正之 小山亭に置酒し、為に賦す

このように、辛棄疾の憤懣が公開のものであるのに対し、陸游の自注には「宮詞」とあるだけで、その憤懣は比較的隠微なものである。これは、本当に宮詞なのだろうか。無論そうではない。この詞における宮人は、まさに彼の「婕妤怨」詩（『劍南詩稿』卷二一）における宮人と同様である。ここには何ほどの激昂があるかも知れないが、「婕

好怨」詩の末尾で、彼はただ次のようにうたっているだけである。

| | | |
|-------|-----|------------------------|
| 妾心剖如丹 | 妾が心 | 剖けば丹の如く |
| 妾骨朽亦香 | 妾が骨 | 朽ちるとも亦た香ばし |
| 後身作羽林 | 後身 | 羽林と作り <small>な</small> |
| 为国死封疆 | 国の為 | に封疆に死せん |

陸游はどこまでも陸游であり、この「宮詞」を除けば、彼は自分の感傷をうたった後、総じて自分の感情を適度に抑制している。たとえば、次のような例がある。

一 叢花

| | | |
|---------|---|---|
| 樽前凝佇漫魂迷 | 樽前に凝佇 <small>たたず</small> めば | 漫 <small>そぞろ</small> に魂は迷い |
| 猶恨負幽期 | 猶お恨む | 幽期 <small>そむ</small> に負けるを |
| 従来不慣傷春涙 | 従来 | 慣れず 傷春の涙 |
| 為伊後 | 伊 <small>かれ</small> の後 <small>おく</small> るるが為 <small>ため</small> に | |
| 滴滿羅衣 | 滴 <small>した</small> りて羅衣 <small>した</small> に満 <small>み</small> つ | |
| 那堪更是 | 那 <small>なん</small> ぞ堪 <small>た</small> えん | 更 <small>さら</small> に是 <small>こ</small> れ |

吹簫池館

吹簫 池館

青子緑陰時

青子 緑陰の時なるに

回廊簾影昼参差
偏共睡相宜

回廊の簾影 昼に参差たり
偏ひしえに睡ねむりを共にするに相よろい宜し

朝雲夢断知何処
倩双燕

朝雲 夢 断えしは 知りぬ 何処ぞ
双燕に倩こい

説与相思

相思を説与せん

従今判了

今より判了す

十分憔悴

十分に憔悴せるは

凶要箇人知

箇もとの人の知らんことを凶もとり要もとめんがためなりと

〔渭南文集〕卷五〇

この詞の末尾は、柳永「鳳棲梧」詞の^⑬

衣带漸寬終不悔

衣带 漸く寬きも 終に悔いず

為伊消得人憔悴

伊かれの為 人 憔悴するに消あたいし得たり

に似ているが、異なっている。なぜなら、柳永がうたっているのは男女間の感情であるが、陸游の詞には、国家への切なる思いが満ちているからである。このような思いが深く真摯であるがゆえに、彼は、辛棄疾「摸魚兒」詞の

休去倚危欄

休めよ 去きて危欄に倚るを

斜陽正在

斜陽 正に在り

煙柳斷腸処

煙柳 斷腸の処に

のような句を書くことはできなかった。陸游は、終始一貫して情緒纏綿という本色を脱しなかったために、豪放の方向に進んで行くことはできなかった。これが、陸游と辛棄疾の分岐点である。

統治者に一定の幻想を抱いていること、これは封建社会の士大夫にありがちなことであり、陸游はこの限界を乗り越えることができなかった。同様に、彼の生活には余裕があり、男女の問題に対する認識がさほど厳格ではなかったため、彼の詩と詞のいづれにも、その形跡が残されている。「烏夜啼（金鴨余香尚暖）」「真珠簾（灯前月下嬉遊処）」などの作品が、そのことを証明している。^⑭最後に、陸游の思想の奥深くには、俗世を超越しようとする思想、特に道家の思想が、幾分残存していることも指摘できる。詞の中では、たとえば「一落索」「破陣子」などがそうである。これらはいずれも、陸游の詞における糟粕である。^⑮

後記^⑯

辛棄疾の出現は、宋詞に新しい局面を切り開いた。陸游の詞は、辛棄疾の詞に比べるとやや遜色があるが、あくまでも「やや」遜色があるに過ぎない。南宋の詞を論じる際、陸游と辛棄疾はまだしも併称し得るが、南宋の詩を論じる際、陸游と辛棄疾が併称されるのを聞いたことがない。このことはまさに、陸游の詞が一定の成就を有し、軽視できないものであることを物語っている。陸游の作品を評価する時には、彼の詞をも考慮に入れねばならず、そうしてはじめて、彼の業績を全面的に見ることができると言える。簡単に言って、彼の詩は新生面を切り開くことができたが、彼の詞は新生面を切り開くことはできなかった。これは、陸游の詞が詩に及ばない理由であり、また辛棄疾の詞に及ばない理由でもある。しかし陸游の詞は意境は深厚、情趣は幽遠で、彼の作品の中で一定の地位を獲得している。またその中には、彼の日常生活をうたったものも若干あり、それによって詩文に言及されていないものを補うことができる。陸游の生涯を理解する手がかりとして、これらの詞は一層、独自の価値を有している。

〔訳者補注〕

① 村上哲見編「陸游『劍南詩稿』詩題索引」（一九八四年三月、奈良女子大学中国文学会）の前言によれば、陸游の『劍南詩稿』所収の詩の実数は九一三五首である。錢仲聯『劍南詩稿校注』は、これ以外に集外詩として「放翁逸稿」四三首、「逸稿統添」二〇首、「逸稿補遺」三三首（断句を除く）、合計九五首を収録しており、これらを合計すれば九二三〇首となる。

② 夏承燾・呉熊和『放翁詞編年箋注』（一九八一年六月、上海古籍出版社）は、上卷（入蜀前及蜀中作）として五九首、下卷（東歸後作）として五六首（断句を除く）、不編年として二九首、合計一四四首の作品を収録している。なお『渭南文集』卷四九は六七首、卷五〇は六三首、合計ちょうど一三〇首の作品を収録している。

③ 夏・呉両氏の『放翁詞編年箋注』は、朱東潤氏がこの論文を書いた時点ではまだ存在しなかった。『全宋詞』は一九四〇年に初版が発行されているが、詞の配列は『渭南文集』に依拠しており、編年にはなっていない。

④ 陸游「釵頭鳳」詞は朱東潤氏の原文には載っていないが、読者の便宜を考え、全文を引用した。同詞は『唐宋名家詞選』所収(79—02)。詳細は『風絮』第五号を参照のこと(三一—頁)。

⑤ 陸游「漁家傲 寄仲高」詞は『唐宋名家詞選』所収(79—05)。詳細は『風絮』第二号を参照のこと(二〇—三頁)。

⑥ ここに列挙されている作品は、趙鼎の「滿江紅(慘結秋陰)」以外、すべて『唐宋名家詞選』に収録されている。岳飛「滿江紅(怒髮衝冠)」は74—01、張元幹「賀新郎(夢繞神州路)」は70—01、朱敦儒「相見歡(金陵城上西樓)」は76—14、張孝祥「六州歌頭(長淮望斷)」は77—01、劉過「沁園春(斗酒彘肩)」は83—01。

⑦ 夏・呉両氏の『放翁詞編年箋注』は、この詞を陸游が蜀を離れ東に帰った淳熙五年の作とし、上巻の最後に配している。

⑧ 陸游「夜遊宮 記夢寄師伯渾」詞は『唐宋名家詞選』所収(79—04)。詳細は『風絮』第三号を参照のこと(二八—七頁)。

⑨ 原文「他追憶過去、也懷念家鄉、但是他却無法理解現實」。この部分の含意は、よくわからない。次にあげられている詞の内容や詞牌から考えて、陸游がなおも古い封建的な価値観や消極的な隱遁思想にとらわれており、より進歩的で積極的な価値観に根差した現状認識を持つことができなかった、と言いたいのであろうか。乞御教示。

⑩ 陸游「訴衷情」詞は『唐宋名家詞選』所収(79—08)。詳細は『風絮』第三号を参照のこと(一九—五頁)。

⑪ 陸游「謝池春」詞は『唐宋名家詞選』所収(79—09)。詳細は『風絮』第三号を参照のこと(二〇—二頁)。

⑫ 辛棄疾「摸魚兒」詞は『唐宋名家詞選』所収(81—01)。内容は、自分の不遇を声高に訴えたものであり、この詞を見た高宗はひどく不機嫌になったが、それでも辛棄疾を処罰しなかったという。羅大経『鶴林玉露』巻一「辛幼安詞」に次のようにある。「辛幼安晚春詞云、更能消幾晚風雨、匆匆春又歸去……休去倚危樓、斜陽正在、煙柳斷腸處。詞意殊怨……使在漢唐時、寧不賈種豆

種桃之禍哉。愚聞、寿皇見此詞、頗不悅、然終不加罪、可謂至德也已」。

⑬ 柳永「鳳棲梧」詞は『唐宋名家詞選』所収(36―06)。「消得」は「值得」に同じで、く値する、の意。

⑭ これらの詞は、いずれも陸游にしては自由奔放に男女の愛をうたったものである。「烏夜啼(金鴨余香尚暖)」詞に「冷落鞦韆伴侶、闌珊打馬心情」とあり、『放翁詞編年箋注』によれば「打馬」は「宋時閨房戲具」である。また「真珠簾(灯前月下嬉遊处)」詞はひそやかな男女の逢瀬をうたい、『本事詩』「情感第一」の崔護(人面桃花)の典故が見える。

⑮ 陸游の「落索」「破陣子」詞はそれぞれ二首ずつあり、いずれも脱俗的な心境をうたう。愛情詞も含め、こうした作品を「糟粕」と切り捨てるのは学問的に公正な態度とは言い難いが、おそらく当時の政情に配慮した面が大きいであろう。

⑯ この「後記」は、朱東潤『陸游研究』「後記」のうち、詞に関する部分を抜き出して翻訳したものである。